

# 花取り踊りと とかの元気村

「つながり」と「支え合い」の源流を求めて

高知県佐川町の生活文化と地域福祉・取材報告その1〈斗賀野地区〉

さ かわ ちょう  
【佐川町】

高知県の中西部、四国山脈の支脈に囲まれた場所に位置。JR土讃線が通り、町内に5つの駅（土佐加茂・西佐川・佐川・襟野々・斗賀野）がある。2023年4月放送開始のNHK連続テレビ小説「らんまん」の主人公、牧野富太郎博士の出身地として有名。名酒「司牡丹」の酒蔵があることでも知られる。

人口1万2238人、6011世帯、高齢化率40.3%（2022年12月末現在）。

町域は、1950年代に合併した旧町村（現在の小学校区）に相当する5地区＝佐川・斗賀野・尾川・黒岩・加茂＝で構成。各地区には集落活動センター、あったかふれあいセンターなどの住民活動の拠点とその運営組織がある。

# 地域福祉計画マップ

NPO法人さかわ夢まち協議会

## さかわエリア



えびす祭り



自主防災訓練



連携力の強化



旧山口家住宅(さかわ観光協会)

地域福祉活動拠点

さかわ夢まちランド  
あったかふれあいセンター-夢まち

尾川地区活性化協議会

## おがわエリア



尾川祭り



配達・見守りサービス



アメゴのつかみどり(お祭り)



尾川川沿いの桜並木

地域福祉活動拠点

集落活動センター-たいこ岩  
あったかふれあいセンター-ひまわり

黒岩いきいき広域隊

## くろいわエリア



敬老会の復活と  
四ツ白太刀踊り



楽しく花壇づくり



福島の祭り



炊き出し訓練

地域福祉活動拠点

集落活動センター-くろいわ  
あったかふれあいセンター-くろいわ

一般社団法人加茂の里づくり会

## かもエリア



アサオのレンゲ生地



梅花園通ウォーキング



加茂の里まつり



JR加茂駅前の緑化

地域福祉活動拠点

集落活動センター-加茂の里  
あったかふれあいセンター-加茂の里

NPO法人とかの元気村

## とかのエリア



伝統文化の継承  
斗賀野花取り祭り



楽しく学ぶ



地域でまじり



近所をつながる

地域福祉活動拠点

とかの集落活動センター-あおぞら  
あったかふれあいセンター-とかの

あなたの さんかて さかわが かわる!!

# とかの 【斗賀野】

佐川町を構成する5地区の一つ。「とがの」とも。36集落・自治会からなる。広大な田畑と周囲の山々、点在する集落が美しい里山の風景を織りなす。古くから農業中心の暮らしが営まれ、現在も全世帯の約3分の1が農家という。人口3097人、1440世帯、高齢化率39.2%（2022年12月末現在）。

住民活動の拠点として「**とかの集落活動センターあおぞら**」がある。同地区で活動する**NPO法人とかの元気村**が指定管理者としてこれを運営。同センター内では、町から同法人への委託事業として「**あったかふれあいセンターとかの**」が開設されている。

# 【とかの<sup>げん</sup>元<sup>き</sup>気<sup>むら</sup>村】

2005年に斗賀野地区の住民有志が設立した地縁型のNPO法人。農業振興、子育て・教育支援、歴史と伝統文化の継承、自然・生活環境の保全、住民交流の促進、地域福祉の向上などを目的に活動。役員12人、監事3人、会員数165人(2023年1月現在)。会員のほぼ3分の2は男性で、中心となる年齢層は70代。大半は同地区の住民だが、町内他地区や町外、県外にも会員がいる。

とかの元気村(以下、元気村)の源流は、1989年に農業者らが発足させた斗賀野土地改良区までさかのぼる。そのため、元気村の活動は現在も草刈り、伐木といった農地や自然環境の保全・保護に関するものが多い。また、農家か否かにかかわらず、本業をリタイヤした世代、特に男性高齢者の活躍の機会と居場所の創出を目指した経緯があり、中高年男性中心の会員構成となっている。

活動拠点は当初、2005年に会員らが農村公園内に手弁当で建設した鉄骨造平屋建ての「元気村役場」に置いた。2017年10月、元気村役場の隣接地に町が「とかの集落活動センターあおぞら」を整備、元気村が指定管理者となり、活動拠点は同センターに移った。なお、元気村役場はこれ以降も集会施設として利用されている。

2014年、町からの委託事業として元気村役場内に「あったかふれあいセンターとかの」を開設。この頃から元気村は地域福祉にも注力するとともに、役員やスタッフ、ボランティアに女性を積極登用するようになった。なお、あったかふれあいセンターとかのは、とかの集落活動センターあおぞらのオープンに伴い、同センター内に移転している。

2018年8月、「とかのわかもの交流会」を初開催。前後して元気村の諸事業への20~40代の比較的若い世代の参画が奨励されるようになり、従来は中高年層が占めていた各種イベントの実行委員などに若者が加わるが多くなった。

# 「とかの集落活動センターあおぞら」



# 「あったかふれあいセンターとかの」の看板が



# 【集活Cと、あったかC】

**集落活動センター（以下、集活C）**は、高知県独自の補助事業に基づく住民活動の拠点。開設・運営に当たる団体は、地域おこしや生活環境の維持・向上を目的に、農産物の栽培・出荷・販売、有害鳥獣対策、交流イベントの企画運営、移住支援、農家レストランやガソリンスタンドの経営、防災活動、移動支援（交通空白地有償運送ほか）、介護サービス、冠婚葬祭、小水力・太陽光などのエネルギー資源活用などを行う。施設整備などのハード面や、人材の導入経費などについて、県が市町村を通じて補助する。

**あったかふれあいセンター（以下、あったかC）**も同じく県補助事業に基づくものだが、こちらは共生型の地域福祉拠点という位置付け。高齢・障害・子育て・生活困窮といった分野別の縦割りにとらわれず、さまざまな支援活動を展開する。主なものとして、各種サロンの開設、サロン利用者の送迎、高齢・障害者世帯の見守り訪問、生活相談の受け付け、介護・保健・医療・福祉などの専門機関へのつなぎ、介護保険事業のホームヘルパーが対応できない屋内外の清掃や片付け、庭仕事などの作業代行などがある。このほか地域の実情に応じ、移動支援をはじめ、健康などをテーマとした学習会の開催、配食サービス、介護予防事業、緊急一時宿泊事業などに取り組むこともできる。市町村から委託を受けた団体が運営に当たり、職員（コーディネーターおよびスタッフ）の人件費や各種運営経費は、市町村が県の補助を活用し委託料として支払う。

佐川町では、佐川地区を除く4地区で町が集活Cを整備。各地区の住民活動組織（斗賀野地区では「**とかの元気村**」）が指定管理者になっている。佐川地区では、町社会福祉協議会が所有する建物を集活C類似の拠点施設とし、町社協が管理運営を住民活動組織に委託している。いずれの拠点でも町が雇用する集落支援員を2～3人程度配置。また、すべての拠点であったかCの運営が行われている。



# 「あったかCとかの」の常設サロン。利用者の半数近くが男性



# 一方、こちらは介護予防教室。ほとんどが女性



# 【あったかCとかの】

「集活Cあおぞら」内で運営され、土日祝日を除く午前9時～午後4時オープン。「集い」(常設サロン)は1杯百円のコーヒーや湯茶(無料)の用意があり、事前予約制で昼食弁当の注文もできる。飲料や食事の持参も可。昼を挟んで利用する人はしばしば、自前の弁当のほか菓子や漬けもの、手料理を余分に持ち込み、居合わせた人たちにおすそ分けする。「集い」の1日当たりの利用者数は30人前後。年齢層は70～80代が中心で、男性が半数近くを占める。小学生が放課後に来て友だちと遊んだり、宿題をする姿も見られる。精神障害のある中年男性や、生きづらさを抱えた若者が「集い」を通じて地域のつながりを回復した例も。子どもから高齢者まで、性別や障害のあるなしにかかわらず誰でも気軽に立ち寄り、喫茶・食事・おしゃべりを楽しめる場になっている。高齢や障害のため自力で来られない人には無料送迎サービスがあり、希望すれば送迎の途中スーパーで買いものもできる。

介護予防サロンは週2回、認知症カフェと歌声サロン「カラオケの日」、それに地域食堂「カレーの日」は月1回、健康・介護・福祉などに関するミニ講座を月1回程度開く。いずれも「集い」とは別室での開催で、喫茶やおしゃべりを楽しみたいだけの「集い」利用者は、これらの活動を気にせず過ごすことができる。

このほか、高齢・障害者世帯などの訪問見守り、相談の受け付けと専門機関へのつなぎ、買いもの代行(コロナ対応として実施)、生活支援(窓拭き、電球交換、草刈り、庭木剪定その他の作業代行)は随時。なお、生活支援は原則1時間500円の有償サービスで、主にあったかCの常勤スタッフが対応。作業内容によっては、登録ボランティア「あったかお助け隊」のメンバーが手伝う。メンバーは2023年1月時点で40～80代の男女約40人。住民参加型の生活支援ボランティア体験イベント「お助け大作戦」は、毎年9月ないし10月の日曜に開催。

あったかCは4人の常勤スタッフ(全員、地区在住女性)で運営。そのうちの1人、元気村の副理事長・森田有紀さん(48)は、あったかCのコーディネーターとして運営全体を統括し、行政や社会福祉協議会、その他の介護、福祉の各専門職・機関との連携構築にも当たる。

# 【元気村と集活C】

元気村の主な事業としては、1月の新年会、6月の総会、9月の敬老会、11月の「**とかのたらふく秋まつり**」の企画・運営（※敬老会と「とかのたらふく秋まつり」は元気村主導の実行委員会が主催）のほか、地区に自生する貴重な山野草やホタルの保護活動などを随時行っている。行政からの受託事業では、「**とかの集落活動センターあおぞら**」の指定管理や「**あったかふれあいセンターとかの**」の運営に加え、公園の指定管理と町道維持業務（ともに2か所ずつ）がある。このうち「**虚空蔵山わんぱく広場**」の年2回の草刈りは「**夏の陣**」（7月）、「**冬の陣**」（12月）と銘打って交流イベント化、作業後に集活Cで焼き肉パーティなどを催す。

「**とかの集落活動センターあおぞら**」は、子ども食堂「**あおぞら食堂**」（月1回）、「**とかのわかもの交流会**」（年1回）などを主催。会議室、厨房などの貸し出し（貸館業務）は随時実施。ちなみに、**あったかC**の運営スペースは貸館業務の一環で確保されている。

集活Cには、元気村だけでなく、「**農事組合法人トピアとかの**」など複数の農業者団体と、「**学校支援地域本部**」の事務局が置かれている。学校支援地域本部は、住民ボランティアが児童の学習支援として農作業体験や読み聞かせ、採点補助、持久走大会の交通誘導、学校施設の清掃・草刈りなどを行う枠組み。

集活Cの運営は、常勤職員2人が担当。ともに町が会計年度任用職員として雇用、配置する集落支援員で、うち1人は**元気村の理事兼事務局長の吉森伸郎さん(66)**。

このほか、元気村のイベントではないが、36集落・自治会が東西南北と中の5組に分かれて競い合う地区民運動会が毎年10月の第4日曜に開かれる。実行委員会や競技委員会の委員には、元気村関係者も多数参加する。地区民運動会は1982年に始まった斗賀野地区の一大行事だが、コロナ禍の影響で2020年から3年連続で中止となっている。

# かつての拠点「元気村役場」(2017年7月7日撮影)



# あったかCは元気村役場でスタートした(常設サロンの様子)



# 2017年10月、村役場から集活Cへ (村役場は集活Cの裏)



元気村と斗賀野の

主要な行事を  
見に行く



〈その1〉

とかの  
わがもの  
交流会

# 若い世代とその子どもたちが集合(2022年11月13日)



# 60~70代の自称「わかもの」も参加



# 炭火で焼き肉。すぐに和気あいあい





会費2千円で飲み放題、食べ放題。コロナ禍でも感染防止に配慮しつつ継続している。

# 子どもたちの「お楽しみ」も用意(ジャンケン大会)



# 閉会後も参加者は名残を惜しみ、なかなか帰らない



# 【とかのわかもの交流会】

集活Cあおぞらが、敷地内で年1回開催する焼き肉パーティー。斗賀野に暮らす若い世代に、交流と親睦の機会を提供する目的で始まった。第1回は2018年8月、2回目以降は夏から秋にかけての時期に開いている。第5回は2022年11月13日。いずれも日曜開催。

毎回、子育て世代とその子どもたち計120人前後が参加する。年齢制限はなく、60~70代の自称「若者」の姿も。参加費は一人2千円(第5回)。

イベント名の表記を「若者」ではなく「わかもの」としたのは、「子どもも高齢世代も希望すれば参加できる気軽さ、ゆるやかさを表すには、漢字よりひらがなのほうがいい」との理由から。実行委員会での話し合いで決まった。

交流会は午後2時に開会し、日没の頃閉会となる。閉会后、片付けが終わって辺りが暗くなっても参加者のほとんどは立ち去らず、敷地内で立ち話に興じる。ようやく帰り始めたと見えて、実は意気投合した人たちが二次会へ出かけたりする様子も。交流会をきっかけにダンスのサークルが結成されるなど、新たなつながりや活動が生まれている。

交流会について**元気村の初代理事長・森正彦さん(75)**は、次のように話す。

「**地元の若者と移住してきた若者を集めて、お互い知り合おうよ、という主旨で始めました。**特に移住者が地域で孤立しないように、**地域社会に参加するきっかけづくりになるように。**元気村の行事は、**実行委員会形式で実施することが多く、委員はこれまでほぼ高齢世代で占められていました。**わかもの交流会は若い世代を中心に実行委を組織し、会員以外も登用しています。わかもの交流会に限りませんが、行事の実行委もまた、**つながりづくりと社会参加の大事な機会。**さまざまな経験をしてもらい、**つながりを広げてもらうことは、地域づくり人材の育成や掘り起こしにもなると期待しています」**



## 〈その2〉

たらふく  
秋まつり

# 第26回「たらふく秋まつり」(2022年11月6日)



# コロナ禍で3年ぶりの開催（会場は集活C隣接の「あおぞら公園」）



# さまざまな団体が食品販売などのブースを構える



# 子ども向けのゲームコーナーも



# 福祉作業所はキッチンカーでパンを販売



# 北海道の物産販売も (姉妹都市交流)



# ステージでは住民が歌や踊り、演奏を披露





# 客席のあちこちに小さな「ビアガーデン」が出現



# 密集を避けるため「餅投げ」は自粛したが、約2千人が来場



# 【たらふく秋まつり】

集活C隣接の「あおぞら公園」（農村公園）で毎年11月初旬に開かれる交流イベント。仮設ステージで住民が歌や踊り、演奏などを披露するほか、20以上の団体が食品販売などのブースを構える。併催行事として、地区の名所旧跡を巡るウォークラリー、集活Cホールでのアート・クラフト作品展示「好きです斗賀野・作品展」なども。当地の祭りやイベントではおなじみの「餅投げ」も行われる。

来場者は斗賀野地区を中心に町内外から訪れる。元気村の推計によると、毎年およそ3千人が足を運んでいる。コロナ禍の影響で3年ぶりの開催となった2022年は、密集を避けるため「餅投げ」など集客力のある一部の恒例プログラムの実施を見送ったが、それでも2千人以上が来場した。

たらふく秋まつりの始まりは、佐川町と北海道常呂町（現・北見市常呂町）との姉妹都市協定に基づく交流事業の一環として、1987年10月に町が開催した物産展までさかのぼる。会場は当初、中心市街地にある町の観光物産施設「佐川地場産センター」だった。来場者が増えて手狭となり、1990年代には斗賀野地区の公園やJA斗賀野支所の敷地で開かれるようになった。2000年代に入り元気村が発足すると、元気村主導による実行委員会形式での企画・運営体制が生まれ、現在に至る。2022年の開催で、町が主催した当時から数えて34回目、斗賀野で開かれるようになって26回目という。元気村が主催または主導するイベントとしては、最大規模を誇る。

〈その3〉

お助け大作戦

# 集活C入り口に「お助け大作戦」の看板(2021年10月17日)



# 朝8時半には約70人が集まった



# 10グループに分かれ、9時頃一斉に出かける



# バケツに掃除や草刈りの道具を入れて...





# 一人暮らしの高齢女性宅を訪問し...



# 掃除に取りかかる (エアコンフィルター清掃の様子)



# 庭の草刈りも



こちらは別のグループ。同じく一人暮らしの高齢女性宅で...



# 庭木の手入れをしたり、草刈りをしたり...



# 窓やサッシの掃除も



# 刈りとった大量の草や枝葉(すべて搬出して作業終了)



# 11時までに作業を終えて集活Cに戻ると...





# みんなで一緒にお昼をいただく(アンケート記入なども)



# 午後4時から振り返りと懇親の会（会費制）



# 【お助け大作戦】

あったかCとかのが主催する生活支援ボランティア体験イベント。2017年9月に始まり、以来毎年1回、9月または10月の日曜に開催している。高齢・障害者世帯を対象に、屋内外の片付けや清掃、敷地の草刈り、庭木の手入れなどを、事前に応募した住民ボランティアが無償で行う。ボランティアとして参加する住民は少ないときで60人前後、多いと90人以上。小学生から80代の高齢者まで、毎回ほぼ全世代がそろそろ。2021年は7～85歳の男女67人が参加。3～9人の10グループに分かれ、申し込みのあった10世帯の作業を分担して行った。

コロナ禍でも住民からは「草刈りや掃除で困っているお年寄りがいるなら、やるべきだ」といった声が多く寄せられ、県の警戒レベルが下がった時期を選んで実施。中止は2020年の1回だけで、このときはコロナの影響ではなく、台風接近で急きょ取りやめとなった。

作業の終了後、参加者は別のボランティアがつくる昼食を一緒にとる。夕方には会費制の宴会を開き、交流と親睦を図る。参加者からは「楽しみながら人助けができる。普段顔を合わせない人とも親しく話ができるし、終わったあとの飲み会も魅力」（49歳男性）といった声が聞かれる。あったかCのコーディネーター森田有紀さんは、「地区のお年寄りが抱える生活課題に気づいたり、ボランティア活動のやりがいや意義を感じ取ったりしてもらうと同時に、住民同士の顔の見えるつながりづくりにもとても役立っています」とその効果を語る。

大作戦実施の背景には、あったかCが通常業務として行う生活支援を補完する狙いもある。あったかCでは、介護保険事業のホームヘルパーでは対応できない片付けや清掃、電球交換、ゴミ出しなどの作業を原則1時間500円で代行する生活支援事業を行っている。作業は常勤のスタッフ4人で分担し、依頼内容によっては登録ボランティア「あったかお助け隊」の手も借りる。しばしば「大掃除」のような依頼があり、対応に苦慮することがあった。そこでコーディネーターの有紀さんは、「大掃除なら年1回でもいいはず。住民参加型の体験イベントにして、一気に作業すれば要望に応えられる」と大作戦を立案した。

# ボランティアの最高齢は、85歳の真辺誠男（せいお）さん



# 自分にできることを（誠男さんの言葉）

「お助け大作戦は、第1回（2017年）のときからずっとボランティアとして参加しています。草刈りや庭木のせん定なんかを引き受けています。刈り払い機はもちろん、チェーンソーも使えますよ。ボランティア活動は元気村ができる以前から、保育園児や小学生の農業体験のサポートなんかをしてきました。活動はたいへんですが、誰かに頼りにされ、役に立てるのは、うれしいです。足腰が丈夫なうちは続けますよ。子どもたちのため、困っている人たちのため、地域のために、自分にできることをする、そういう姿勢を下の世代に示すことも私の役目かと思います」

ほかにもさまざまなイベントや事業が、  
多くの住民の参加、協力のもとで行われている。

それらの実施に要する人手は、いつも必ず確保される。  
(みんな当然のことのように集まってくる)

なぜ？

# まず、この人に聞いてみた





元氣村初代村長(理事長)森正彦さん(75)





正彦さんは元気村の設立母体「とかの里づくり懇話会」でも会長を務めるなど、斗賀野の地域づくりでは常に中心的な役割を果たしてきた。

元気村の設立時、正彦さんの呼びかけに応じて会員になった住民は141人に上る。

# つながりと連携の基盤（正彦さんの言葉）

「たとえば、あったかCのスタッフが『お助け大作戦をやりたい』と言えば、元気村として住民に呼びかけると、80人ぐらいはすぐ集まります。何か新しいことを始めるとき、すぐ実施態勢が整うんです。つながりと連携・協力の組織的な基盤として元気村があり、その活動拠点として集活C、あったかCがあるわけですよ」

「元気村が関わる主な行事としては、新年会、総会、わんぱく広場（公園）の草刈りと焼き肉パーティーをセットにした『夏の陣』『冬の陣』、わかもの交流会、敬老会、たらふく秋まつりなどがあり、これに加えて斗賀野全体で運営する地区民運動会があります。さまざまな行事の積み重ねが、地域のきずな、人のつながりを育み、『私たちの地域』という意識を持たせてくれるわけです。そういう意識、つながりがあるから、何か新しいことをしようとなったときにも人が集まり、協力し、元気村の事業もうまくまわるんですね。好循環ですよ」

「たとえば夏の陣、冬の陣の草刈りには、元気村の会員を中心に30人ぐらいい参加するんですが、3分の1は若い世代です。元気村では、保育園児や小学生の農業体験や昔遊びなどのサポートもしていて、子どもたちの親がそのお礼にと、草刈りに参加してくれたりもするんですね。必ずしも元気村の会員でなくても来てくれるんです。一つの行事がきっかけになって別の行事にも参加するというような、連鎖反応があるんです」

「行事の準備や実行、終わったあとの反省会も含めて、つながりづくりです。一緒に汗を流して、終わったら美味しいお酒をいただく。これが大事なんです」

正彦さんは「飲み会」の効能を強調する。  
確かに、斗賀野の人たちは何かにつけて杯を交わす。

共同作業やイベントだけでなく、  
かしこまった会議の席でも、話し合いが終われば、

**飲み会**

# たとえば、2017年度第3回あったかC運営委員会(12月22日)



# 会議が終わると、こうなった(会費制)



# 同じく2018年度の第3回運営委員会(12月21日)



# 話し合いが終われば、やっぱりこうなる



地域の行事と飲み会が活発だからつながりが育まれ、  
つながりがあるから行事の参加者が確保できる。

地域社会への参加とつながりづくりは、  
「ニワトリと卵」の関係にも似ている。

どちらが先かというより、  
分かちがたく結びついていて循環している。



# 続いて、この人に話を聞いた



元気村の第4代村長、田鍋勝さん



勝さんは2021年6月、第4代の元気村村長（理事長）に就任し、「コロナ禍に負けない地域づくり」の先頭に立った。

2023年1月13日、ガンのため逝去。享年60歳。

2021年10月17日の「お助け大作戦」の終了後、インタビューに応じた勝さんは、斗賀野と元気村への熱い思いを語ってくれた。



# 斗賀野の底力（勝さんの言葉・その1）

「お助け大作戦などの行事のあとは、僕はいつも斗賀野の底力を感じます。夏の陣、冬の陣の草刈りでもそうですが、終わると飲み会やバーベキューをするんですね。本当にみんな仲がいいし、行事に参加してくれる。草刈りに必ず参加する人たちがいるんですけど、どうしていつも来てくれるんですかって聞いてみたんです。そうしたら、みんなで汗をかいて、終わったあとに一緒に飲むのがすごく楽しいからって言うんですよ。そんな楽しみがあるから、若い人の参加も増えてきました。こういうことの積み重ねがとても重要だと思うんです。『何かやったら飲む、飲みながら楽しくやろう』っていうのは、初代村長の正彦さんからの教えでもあります。楽しさをつくるのが、地域づくりのポイント。だから僕はどんな行事も活動も、つらいと思ったことはありません。まず自分が楽しむことを考えてますので」

「地区民運動会では、まあ普通はジャージとか短パンとかTシャツを着るわけですが、僕は実行委員長でもありますので、羽織袴です。種目ごとに一等になるところがありますよね、一等の人たちのところに行って一緒に万歳三唱をする、それが僕の仕事なんです。面白いでしょ。運動会に限らず、面白いこと、楽しいこと、みんなにウケることは、どんどん増やしていく。そんな形で、僕らは（地域づくりを）やっていますよ」

「お助け大作戦も、ボランティアの人たちや（作業を依頼した）お年寄りが、みんな楽しそうでしょ。僕も最初はびっくりしました、ニコニコしながら作業してるんですから。みなさん斗賀野が好きなんだなあって思いました。斗賀野が好き、そこに住んでいる人が好き。結局そういうことなんです。僕なんか、斗賀野を一番好きなのは自分だ、ぐらいに思ってます。僕は斗賀野を愛していますし、斗賀野にも愛されていると思ってるんです。お助け大作戦などの行事に参加することは、そういう気持ちをみんなで分かち合うことです。参加して、楽しむことで、さらに斗賀野が好きになる。わかもの交流会も同じ。真剣にやっています。真剣に交流して真剣に飲む。ちょっと飲むんじゃなくて、言い方がおかしいですけど、真剣に交流できる飲み会にしています」

## タテのつながりを（勝さんの言葉・その2）

「お助け大作戦には行政や社協の職員の方も参加してくれています。そこで一緒に汗をかいて、住民と顔見知りになってます。まあとにかく、一緒に作業できるのがうれしいですよ。行政、社協と住民の距離が近くなります。意見を言うとか、陳情するとかじゃなくて、普通に話をして、雑談をして、実はそれがもう意見交換になっている、そんな感じでいいんじゃないかと思っています」

「斗賀野に少し足りないのは、世代間のタテのつながりだと思うんですよ。だからといって、世代間の意見交換の場を設けるとかいうのではなくて、自然にこう、楽しく話をするなかで仲良くなっていくようなことが必要です。このあいだ飲み会の席で、35歳の人と70過ぎの人が話をしてました。僕は横で聞いていたんですが、仕事の話になって、35歳の人から『営業してます』と。そうしたら70過ぎの人が『営業というのは仕事そのものが人生やけ、とにかくガンバリなさい』とか、僕が聞いてもなるほどと思うことをいろいろと言うわけです。僕はもう、すごく感動しました。そういう大先輩が斗賀野にはいっぱいいるんです。勉強会とか研修会じゃなく、飲み会の際に大先輩とそんな話をしながら、若い人も成長していったらいいなと思うんです。そういう世代間の関係は『さあ、つくれ』というのではなくて、自然に生まれてくるものじゃないとダメなんです。ちょっとイライラするぐらい、ゆっくりできていくものですよ。10年計画って、僕は言ってますけど、タテの自然なつながりができていって、そのタテのつながりのなかで支え合えるようになってほしいですね。同じ斗賀野の仲間だという気持ちは、世代に関係なく同じように持てるものだと思いますし、そういう気持ちがあるから支え合えるんだと思います」

さらに、この人に話を聞く





元気村の副理事長で、あったかCのコーディネーターでもある森田有紀さん(48)

# 自分事として捉える（有紀さんの言葉）

「たらふく秋まつりや地区民運動会のように、大人数で不特定多数が出入りする行事はコロナで中止になったりもしましたが、お助け大作戦は中止にはなりませんでした。警戒レベルが高い時期を避けて日程を調整することはありますけど、『中止にせず、できることをやろう』といった声が多く寄せられたんです。普通は『感染が起きたらどうする』とか『誰が責任を取るんだ』みたいな話になりがちですよ。中止にするのが一番簡単。でも、斗賀野ではそういう発想にはならない。『できる範囲でかまわんき、やろうや』となる。私たち（スタッフ）がやりましょと働きかけるのではなく、逆にあと押しされています。斗賀野のために何かしようとなると、『やれることをやっちゃらな、いかんがやろうかねえ』と、斗賀野の住民にはそんなふう地域のことを自分事として捉える意識というか、住民活動の土壌ができています。わかもの交流会も『会場は外やき、構わんろう』となって、続けています」

「お助け大作戦の本当の立役者は、ボランティアを受け入れてくれるお年寄りです。ボランティアさんたちに笑顔を向け、喜びと感謝を伝えてくれる。ボランティアさんたちは、自分にできることをして誰かの役に立つ喜びややりがいを感じられる。だから、実はお互いに『ありがとう』なんです。お年寄りは一方的にお世話されるだけじゃなく、大事な役割を果たしています。見守りネットワークの会議には、90歳になる福祉委員さんも来られます。もう見守られる側だったりもするけど、ネットワークの名簿に名前があるうちは、なんとしてでも会議に出て役割を果たそうとします。それでいいと思います。斗賀野では5つぐらいの地区でサロン活動をやっているんですけど、世話役なのか利用者なのか、傍目にはよくわからないような世話役さんもおられます。世話役としての居場所があるから来るわけ。周囲が『もうお役御免です』みたいに言うてはいけませんよ。お世話されるばかりが、幸せではないと思うから」

「斗賀野のいいところも課題も、ちゃんと自分事として捉えてくれる人をもっと増やしたい。お助け大作戦もわかもの交流会もほかの行事も、続けていくことでもっと多くの人に関わってもらい、斗賀野のことをより深く知ってほしいと思います」



# 「世話されるのが幸せではない」

有紀さんが語ったこの言葉は、あったかCの「集い」（常設サロン）に男性高齢者の姿が多く見られることとも関係がありそうだ。

あったかCの機能の一つに高齢・障害者世帯の訪問見守りがある。有紀さんらスタッフが、その業務に当たっている。見守りの対象者が、「集い」の常連と同じ集落に暮らしている場合、スタッフは常連に「その人のことを気に掛けてあげて。なにかおかしいと思ったら、いつでも、どんなこともでもいいから私たちに教えて」と頼んでおく。

集落内の住民同士は、隣近所の家の中の灯りの点いた・消えた、カーテンの開いた・閉まった、洗濯物の干された・取り込まれた、畑仕事や庭仕事の様子などをさりげなく窺う。顔を合わせればあいさつを交わす。いつもと様子が違えばすぐに気づく。長年の近所付き合いで培われた、天然の「見守りネットワーク」だ。あったかCのスタッフは、これを最大限に生かしている。「集い」の利用者は支援されるべき高齢者ではなく、あったかCの見守り機能の担い手でもある。「集い」に通うことで、地域で一つの役割を果たせるわけだ。なにがしかの役割があることは、男性が気兼ねなく過ごせる「居場所」の大事な要素だろう。

スタッフは、常連の「特技」もよく知っている。たとえば、大工仕事得意な人には掲示板などの製作を、野菜づくりをしている人には地域食堂の食材提供を依頼する。「集い」の利用者たちは、こうした依頼に快く応じる。「世話される」だけの人にはならない。

ちなみに、男性には不人気なことが多い「介護予防」や「認知症予防」の体操やゲーム、レクリエーションなどは、この「集い」にはない。ただ喫茶や食事、おしゃべりを楽しむだけでいい。体操などが行われるのは別室で、「集い」の利用者はそれらにわずらわされることがない。

そしてこの人...





元気村の理事で、設立当初から事務局長  
を務める吉森伸郎さん(66)

# つながりの起点 (伸郎さんの言葉)

「元気村は元々、退職した人、特に男性ですけど、**高齢世代の男性が集まって居場所と役割、活躍の場をつくろう、過疎化と高齢化が進みつつある斗賀野を何とかしようという発想で立ち上げられたんですよ。**『若いもんには負けんぞ』っていう気概もありました。だからその活動は、男の人たちの草刈りから始まったんです。草刈りが原点ですね。女性も一定数いました。ただ、当初女性は、本当に限られた人だけが参加していました。徐々に『とかの女子会』などのボランティアグループが結成され、**元気村の活動にも関わるようになって、現在ではもう、女性の力なしには立ちゆかないくらいです**」

「元気村もそうですし、**地区民運動会、あったかC、お助け大作戦、わかもの交流会など、地域デビューの機会がいろいろあります。**私が地域の活動に関わり始めたのは、たらふく秋まつりからですね。面白そうだと思える場や活動は人それぞれですけど、斗賀野にはいろいろ用意されていると思います。**一つのことをきっかけに、参加や協力の幅を広げていける、つながりの起点になればいいんです**」

「斗賀野の住民のまとまりの良さというのは確かにあると思います。理由をつけるとしたら、**この地域の風土が大きく影響しているんじゃないかと思うんですね。**まず盆地だということ。谷筋のような線形ではなく、円形の地勢はお互いの顔を見えやすくすると思います。中央の平坦な場所に人や農地が集中しますからね。農業が機械化される以前は、田植えや稲刈りなどはずっと助け合ってやってきたでしょうし。それと、移住者、よそ者が多いということがあります。私もIターン、よそ者です。この地区は、よそ者によく耳を傾けてくれるし、よそ者の言うことに納得すると、すぐく応援してくれる。そういう土地柄というか、住民気質があるんです。だから、何か新しいことを始めるとなったとき、人が集まって協力してくれるんでしょね」

# 「斗賀野はまとまりがいい」

その理由や背景についての、正彦さん、勝さん、有紀さん、伸郎さんのコメントを紹介した。ほかにも何人かに「なぜまとまりがいいのか」と質問してみたが、答えはこの4人と重なるところが多かった。

ただ、なかには「伝統的な神祭や郷土芸能がよく継承されていることも、要因の一つ」と指摘する人もいた。**田村勇勝** (ゆうしょう) さんは、その一人。

# お助け大作戦で高齢者宅の庭の手入れをする勇勝さん



# たらふく秋まつりの会場設営ではフォークリフトの運転も





元気村の農業振興部会長で「農事組合法人トピアとかの」副代表理事でもある田村勇勝さん(75)。

お助け大作戦(2021年10月17日)のあとの飲み会するとき、神祭と郷土芸能の重要性を教えてくれた。



# 斗賀野のバックボーン(勇勝さんの言葉)

「毎年11月に白倉神社と美都岐神社でお祭りがあって、子ども、若者と大人が一緒になって花取り踊りという踊りを奉納します。斗賀野の伝統的な郷土芸能ですよ。花取り踊り保存会という組織があります。いま、斗賀野の地域づくりに熱心に参加しているのは、みんな保存会で活動してきた人たちなんです。保存会は、元気村が設立されるずっと前から、地域のタテヨコのつながりをつくってきました。お祭りが斗賀野のつながりとまとまりのバックボーンとしてあるのだと思います。私の息子たちも保存会の活動に加わっていました」

「人を守り育てるつながりの力、地域のカッていいうのがあると思います。私は、子どもたちを地域に育ててもらったと思っています。その恩返しをしたいという気持ちもあって、私も元気村に加わりました。お助け大作戦には、初回からずっと参加しています。困りごとを抱えたお年寄りが、私たちの手助けで喜ぶ様子を見るとうれしい。若い連中と一緒に作業したり、飲んだりして関わりを持てるのもありがたいと思います」

「私もいつか年を取って体が思うように動かなくなる時が来ます。動けるうちに地域の役に立つ、それは、いつか誰かの世話になるための貯金みたいなもの。年を取っても斗賀野で安心して暮らせるようにするのは、自分のためでもあるんです」

〈その4〉

花取り踊り

# 【花取り踊り】

花取り踊りは、斗賀野に伝わる郷土芸能の一つ。毎年11月12日、白倉神社（一の宮）と美都岐神社（二の宮）の秋季例祭で踊りが奉納される。踊り手は「たっつけ袴」をはいた武者姿となり、山鳥の尾羽などで飾った花笠をかぶり、太刀（たち）や薙刀（なぎなた）を振るって踊る。踊りの前後、天狗が竹で地面を打ち邪気を払いつつ、子どもたちと戯れる。

始まりは戦国時代末期の1600年頃とされる。かつて踊り手は斗賀野の各集落から2人ずつ選ばれた青年男性が務め、少なくとも3年間は踊り手として活動し、必ず後輩への引き継ぎをして引退するしきたりがあった。1940年代の戦中・戦後の混乱で継承が一時途絶。20年近い空白期間を経て1957年、有志が「**花取り踊り保存会**」を結成し、復活にこぎ着けた（神社総代会編「白倉神社 美都岐神社誌」より）。保存会は、青年団の男性メンバーが中心となり運営。のちに青年団組織が衰退、解散に追い込まれると、代わって20代以上の有志男女30人ほどが保存会運営を引き継ぎ、現在に至る。

1990年代半ば以降、踊り手は20歳未満の若年層へと拡大、女性も踊りに参加できるようになった（かつては女人禁制）。近年は小中学生を中心に子どもの踊り手が多いときで30人近くにのぼり、大人の踊り手を合わせ総勢60人近くが両神社の境内で踊りを奉納する。親子が一緒に踊る例も珍しくない。なお、例祭当日が平日の場合、踊りに参加する地元の小中学生は、公欠扱いとなる。

例祭は2020年、21年、コロナ禍の影響で大幅に規模を縮小した。踊りの奉納は保存会会員の大人8人ほどで済ませている。2022年は、保存会として子どもや若者への積極的な参加の呼びかけは控える一方、希望者は誰でも踊って構わないこととした。これにより中学1年から大学2年まで（12～20歳）の6人と、保存会会員の大人11人（29～59歳、天狗役2人も含む）の計17人が踊り手を務めた。当日は多くの見物客が詰めかけ、コロナ前に近いにぎわいを取り戻した。

# 花取り踊りの奉納（白倉神社、2022年11月12日）



# 3年ぶりに子どもたちが踊り手として参加



# 花取り踊りを見に行く

2022年11月、勇勝さんが「斗賀野のバックボーン」と指摘する祭りと踊りの、準備から本番、終了後の打ち上げまでを見せてもらうことにした。

# 踊りの練習会 (2022年11月10日の夜)



# 足の運び、手の位置など細かく確認





# 休憩時間。水分補給にビールも



# 9月に「出発式」

花取り踊り保存会は例年9月上旬、「出発式」と銘打った集会を開く(2022年はコロナの影響もあり、例年よりやや遅い9月24日開催)。出発式では本番までの練習日程などを話し合い、そのあと宴会を開いて氣勢を上げる。

出発式以降、会の新人や踊りに不慣れな子どもたちの踊りの練習が本格化する。9月は週1回程度、10月は週2回程度のペースで稽古を重ね、11月12日の本番に備える。

# 祭り前夜、最後の練習 (2022年11月11日)



# 練習のあと「宵祭り」と称する前夜祭の宴会を開く



# 乾杯。自然に笑顔がこぼれる

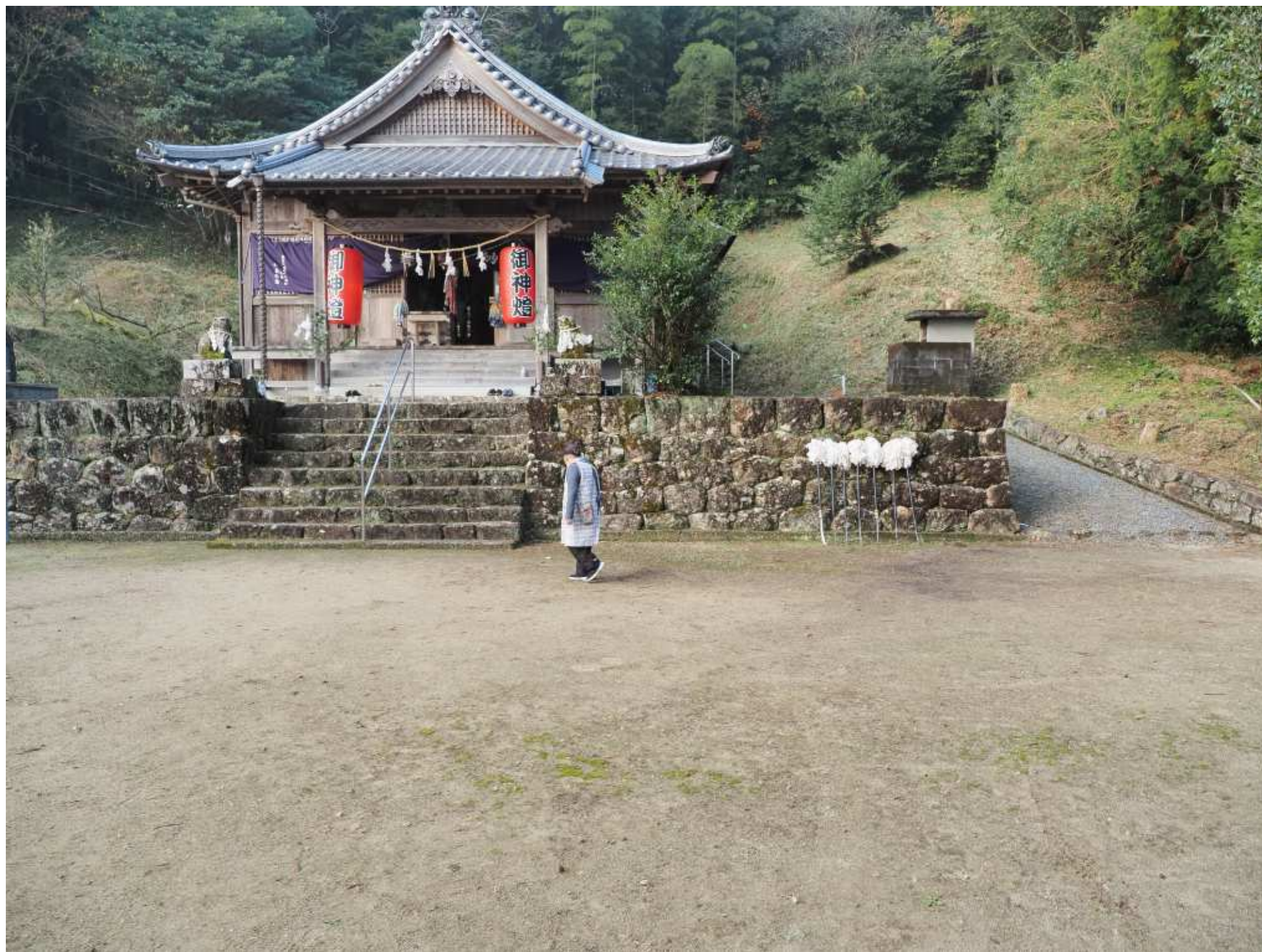


# 子どもの参加で盛り上がる

2022年の秋季例祭も、コロナ感染防止に配慮し、「餅投げ」や「流鏝馬(やぶさめ)」など一部の行事は実施が見送られている。

それでも、3年ぶりに子ども・若者が踊りに加わるとあって、練習会でも宵祭りの宴席でも、保存会メンバーらの気持ちは従来にも増して盛り上がった。

# 秋季例祭の当日。早朝から住民の姿が(白倉神社)



# 秋季例祭の朝

2022年11月12日。午前中に例祭が執り行われる白倉神社には、朝7時頃には神社総代や世話役の住民、保存会のメンバーや踊り手たちが集まり始める。

世話役には、本当（ほんどう）、相当（あいどう）、肝入（きもいり）、別当（べっとう）などと呼ばれる役があり、総称して「当家（とうや）」という。

当家は単独または複数の集落が年ごとに交替する輪番制で、白倉、美都岐の両神社それぞれに配置される。当家になった集落では、各戸1、2人ずつ準備や片付けに要する人手を出す。「集落の住民総出でやらないと当家は務まらない。とてもたいへんだが、これがあるから、集落住民のつながりができるのだと思う」（当家の一人）

今回の例祭では、白倉神社は「岩井口」と「塚谷」の2集落が、美都岐神社は「大平」の1集落が当家を務めた。例祭に合わせ、当家の引き継ぎ式も行われる。



# 花取り踊りの道具を運び込む保存会メンバー



# 社務所兼集会所では、花笠などの衣装を準備しつつ...



# 踊り手たちが一緒に朝食



当然のようにビール。飲んで気合いを入れる



境内では「当家」の人たちが...



# もみ殻を敷いて、踊りの舞台設営



# 「当家」の女性たち。集合写真もまとまりよく



# 9時半。保育園児の「子ども神輿」が入場





# 続いて天狗が歩きまわり、邪気を払う



子どもたちは泣き出したり...



# 勇ましく力比べをしたり



# 天狗のかごには、菓子や野の花が入っている



# 10時頃、踊り手たちが神事に臨み...



# 踊りを奉納 (途中休憩を挟んで1時間ほど踊る)



# 熱心に見守る地元の人たち



# 大人も子どもも、大勢詰めかけた







神社の元総代、小原弘璋さん(77)

## 若い人の参加に感謝（弘璋さんの言葉）

「若い人たちが踊ってくれることに、感謝の気持ちでいっぱいです。おかげで祭りがとても盛り上がります。かつては大人の男性だけが、真剣を使って踊っていたんですよ。なかなか踊り手を確保できない時期が続いたこともありましたが、いまは『踊りたい』と自ら希望する子どもたちがたくさんいます。本当に素晴らしいことだと思います」

# 11時頃、白倉神社の例祭が終了



# 「当家」の人たちが片付け



# 子どもからお年寄りまで、みんなで作業



# 踊り手たちは集会所でお昼(大人はもちろんビールも)



# 12時半頃、美都岐神社へ



# 神事に参列...





# 神事や踊りの合間、天狗の出番だ



# 天狗に抱えられ、元気な泣き声を響かせる幼児



# お母さんが来た途端、安心して泣きやむ



# 天狗は実は、子どもたちの味方（野の花や菓子等を配る様子）



# 踊りの奉納



# ここでも大勢の住民が見守る



# 踊りと天狗、実りと子ども

白倉、美都岐両神社の秋季例祭には多くの子どもがやって来て、にぎやかな歓声を響かせる。そこで奉納される花取り踊りは、長い歴史を持つ伝統芸能だが、いかめしさや堅苦しさはあまり感じさせない。祭りの場は和やかで華やいだ雰囲気彩られている。天狗と子どもたちは、この雰囲気醸成に大事な役割を果たしている。

こうした秋の神祭は、米をはじめとする農作物の実りに感謝し、来季の豊作を祈願する信仰行事であると同時に、たいへんな労苦を伴ったであろう稲の刈り取りを集落全体でやり遂げたあとの、慰労を目的とした娯楽の祭典でもあったに違いない。

花取り踊りの由来として、難攻不落の城を攻略する説話が伝わる。史実かどうか不明という。戦国の世の争いの功績よりも、むしろ日照りや水不足、冷害、大風、病害虫などの農業の「難敵」を、村人が一丸となって知恵と工夫と努力で克服する姿を（そうあってほしいとの願いも込めて）城の攻略説話になぞらえ、美しく勇ましい踊りで称える意味もあったのかもしれない。

豊かな実り、そして子の誕生と健やかな成長は、集落と家の繁栄につながるものとして祝われ、また切に願われる。その願いがかなえられるよう、農作物の実りには花取り踊りが、子の成長には子どもたちの泣いたり笑ったりする姿が、神に捧げられているように見える。

天狗の振る舞いに右往左往し、泣き笑いする子どもを、大人たちがいとおしげに見守る。その様子は、集落全体で子どもを守り、育てていくのだという決意を全員で確認し、共有する重要な儀式と思えてならない。

神祭と花取り踊りは、その準備や片付けの過程も含めて、人びとが集い、つながり、支え合うことのたいせつさを確かめ合う、一種の総決起集会のようでもある。

# 美都岐神社のあと、介護施設で踊りを披露





# 高齡でも障害があっても

高齡・障害者が介護や福祉のサービスを利用すればするほど、従来その人が持っている（あるいは持てるはずの）、地域の間人間関係から切り離されていく傾向が顕著となる。

花取り踊りが介護施設で舞われることには、単なる「慰問活動」を越えた意味が含まれているように思われる。子どもの成長を集落全体で見守るように、高齡でも障害があっても、地域のつながりが切れないよう、自分らしく安心して暮らせるよう、みんなで支えていくのだという意志の表明にも見える。

なお、コロナ前は訪問する介護施設は4か所だったが、2020年、21年は訪問は中止。22年は1か所だけ復活した。

ちなみに、

# イスに掛けて美都岐神社の祭りを見物する人たちと...



# たらふく秋まつりを訪れた、この人たち (写真の中央手前付近) ...



# 「ぷらっとホームさかわ」を利用する人たちだ



# 【ぷらっとホームさかわ】

佐川町社会福祉協議会が運営する「地域共生交流拠点」。2020年8月にオープンした。

2階建ての1階フロアは、高齢者向けの通所・訪問・宿泊サービスと、障害のある子どもたち向けの療育や居場所、生活介護、短期入居サービスとが一体的に運用されている。一般住民がサロンやサークル活動に利用できる交流スペースも併設。2階フロアは認知症対応型の高齢者グループホームとなっている。

施設長の田村和裕さんは、ぷらっとホームさかわの利用者と一般住民の交流の機会をできる限り多くしたい考えだ。「高齢でも障害があっても、地域住民の一員ですから」（和裕さん）。たらふく秋まつりや神祭へ利用者を連れ出すのも、そうした考えに基づく実践の一つ。



施設長の田村和裕さん(51)は、次のように話す。

「要介護かどうか、障害があるかどうかに関係なく、人は人との関わりを持つことができるし、その関わりのなかで成長し、幸せを感じるものです。だから、いろんな人に『ぷらっとホームさかわ』に来てもらいたいし、こちらからも積極的に出かけて行きたいですね」

和裕さんは田村勇勝さんの長男。かつて花取り踊りの踊り手も務めた。

話は花取り踊りに戻る



# 踊りが終わったそのあとは...



# 集会所に踊り手や保存会のメンバーらが集まり...



# 焼き鳥やら...



# 手料理やら...



飲みものをたっぷり用意して...



# みんなで宴会の準備



# 乾杯。お互いの労をねぎらう



# 子どもたちも高々と乾杯(※コップの中身は、お茶や乳酸菌飲料)





そしてこの人は...





たらふく秋まつりの運営に携わり…

# わかもの交流会では乾杯の音頭を取った...





花取り踊り保存会会長、あけお山中明男さん(カ)

# 子や孫が受け継ぐ (明男さんの言葉)

「一昨年、去年と2年続けてコロナの影響で、花取り踊りは大幅に規模を縮小しました。踊りの奉納は大人8、9人だけでやったんですよ。見物人はほとんどいなかった。今年(2022年)は子どもたちが加わってくれて、盛り上がりましたね。子どもたちは自ら踊りたいと言って参加してくれたんです。感激ですよ。なかには受験を控えた子もいるんですが、それでも参加してくれました」

「私は18歳の頃から花取り踊り保存会に入って活動しています。会長になったのは、25年ほど前。ちょうどその頃から子どもや若者が大勢参加してくれるようになりました。私の息子や孫たちも踊りを受け継いでくれました。すごくうれしいです。続けてきて本当によかったと思います。保存会の仲間と飲むのも楽しいですよ。保存会はかつて、会員が6人ぐらいまで減ったことがあるんです。そのときは知り合いのツテを頼ったり、あちこちに声をかけたりして、どうにか頭数をそろえて踊りを続けてきました」

「たらふく秋まつりは、斗賀野で開かれるようになって現在まで20年以上続いているわけですが、企画や運営の中核を担う人たちの多くが、実は保存会のメンバーなんですよ。保存会は単に郷土芸能を継承するだけでなく、さまざまな場面で活躍する地域人材の確保、育成にも貢献していると思います」

# 明男さんの「息子や孫たち」



# 親子で踊る

実は、踊り手の大半は、親子で参加している。

今回踊りを披露した中学1年から大学2年までの子ども・若者に、参加のきっかけや理由を聞くと、「友だちがやっているのを見て、自分もやりたいと思った」「太刀を持って踊るのがカッコいい。花取り踊りに参加しないと太刀を振り回すことなんかできない」「みんなと踊るのが楽しい。だからずっと続けている」などと答えてくれた。

全員、小学生の頃に踊りを習い始めている。親から命じられたり勧められたりしたことを理由に挙げた人はいない。始めたこと、続けることは、あくまでも自発的な動機による。

# 子ども・若者たちは自ら望んで参加





# 子どもの活躍と社会参加

あったかCコーディネーター森田有紀さんや元気村の事務局長・吉森伸郎さんは、主に高齢世代の活躍の場の創出や役割づくりの重要性を強調している（別掲の2人のコメント参照）。インタビューの主要なテーマが「高齢者の生活支援」だったためだが、そうした考え方は必ずしも高齢世代に限ったことではなく、子どもにも当てはまる。しかもそれは、地区住民の共通認識でもあるようだ。コロナ禍がなければ踊りに加わる子どもは多いときで30人ほどになる。花取り踊りが奉納される11月12日が平日に当たる場合は、踊りに参加する小中学生は公欠扱い。子どもの活躍が重んじられている証しだろう。

数百年続く伝統芸能の担い手として期待、祝福され、喝采を浴びるのは、うれしく、誇らしい経験に違いない。子どもたちは練習を重ね、踊りを奉納する。親や教師以外の多くの大人と親しく接し、斗賀野の歴史や生活文化、人間関係に触れる。それは、生きる力を養うことでもある。

とかのわかもの交流会では、若い親たちに交じって大勢の子どもが焼き肉パーティーを楽しむ。お助け大作戦には毎回必ず数人の子どもがボランティアとして参加する。たらふく秋まつりのステージでは、保育所と小中学校の児童生徒がダンスや合唱、吹奏楽、和太鼓演奏などを披露する。あったかCの常設サロンには放課後の時間帯、毎日のように子どもたちがやって来て、遊んだり宿題をしたりする。月に1度の地域食堂は、いつも親子連れでにぎわう。田村勇勝さんが自分の子どもたちを「地域に育ててもらった」（別掲コメント参照）と話すように、斗賀野では、子どもが参加できる多彩な場や活動が用意されている。

裏方として踊りを  
支える人たち

たとえば、この女性。食事の世話をしたり...



# 衣装の着付けをしたり...



# 天狗の手伝いもして...



# 率先して宴会の準備にあたる...



# いつも場を明るく活気づける、山中紀美さん(68)



# たらふく秋まつりではダンスを披露





# 誰もが楽しく(紀美さんの言葉)

「花取り踊りの着付けは30年ぐらい前から担当しています。保存会の会計も引き受けていますよ。華々しい舞台の背後に、裏方の仕事がたくさんあるんです」

「伝統文化が大事だと言っても、担い手を確保しないとどうにもなりません。地区の住民同士のつながりと、行事に参加しようという気持ちを持ってもらえるようにすることが肝心です。私の場合、地区の行事に積極的に関わるようになったのは、うちのダンナ(保存会会長の山中明男さん)が30代の頃に自治会長になったことがきっかけだったと思います。集落行事のお世話をしないといけなくて、そこで自然に参加意識が養われた感じですね」

「地区の行事に参加しやすい雰囲気づくりって、結構重要ですよ。たとえば、この飲み会(祭りのあとの宴会)だって、若い人から地区の重鎮まで参加してますけど、かしこまったガチガチの雰囲気で行っていたら、若い人は敬遠するでしょう。若い人も年配の人も、一緒に楽しく過ごせるようにしないと。若者の話にきちんと耳を傾ける、場合によっては助言もするけど、絶対に(若者の考えを)頭ごなしに否定しない。それと、若い人が何かに挑戦するときには、年配の人はきちんと応援して、足りない部分は補ってあげて、たとえ失敗しても怒らず『次がんばろうや』と笑って済ますとか、落ち込んでいれば優しくフォローするとか、そういうことがとっても大事」

「いろんな個性、人格がありますから、ときにはすれ違いやあつれきが生まれたりしますよ。地域はいろんな人の集合体ですから。いろんな人がいるから面白いんです。とにかく、何事も楽しいと思えることが大事。楽しいと思えば、自分から進んで参加します。誰もが楽しいと感じられる環境をつくっていくこと、それが(地域づくりの)鍵ですよ」

ベテランの踊り手たちは、  
どんな思いを持っているのか

たらふく秋まつりに家族連れで来ていたこの人は...





村岡拓郎さん(40)。花取り踊りで太鼓を担当。12歳から28年間、踊りを続けている。1990年代に小中学生が参加するようになったその頃に踊り始めた最初の世代。

「地域の間関係が希薄化していると言われていて、斗賀野も例外ではないと思いますが、神祭や踊りを守り継ぐことが、人のつながりを保つことだという認識は、ずっと持っています」

「斗賀野の一番の魅力は、つながりの豊かさ。子どもお年寄りも、つながりの輪のなかで、みんなから見守られています」

「神祭や花取り踊りは、世代を超えて、楽しみながら人と人がつながる手段ですよ」

祭りの日、最初に来て最後まで現場に残っていたこの人...



# 踊りの指導者で...





保存会の世話役も務める庄野治さん(49)



治さんは、20歳で保存会に入ったという。30年近く会の活動に携わり、10年ほど前から踊りの指導役や会の世話役を務めている。

「保存会に入ったきっかけ？ 私の1、2歳上の先輩に飲み会に呼ばれて、ビールを飲んだ。そうしたら、『飲んだな、飲んだら踊りをやれ』と。私らの年代は、だいたいそんな感じで保存会に入ってます」

「やっぱりタテヨコのつながりがだいぶ広がったと思いますよ。元気村やら何やらで、いろいろな役を任せられるようになったのも、保存会をやっていたからでしょうね」

「継承の意義とか、あんまり難しいことは考えません。保存会の活動はたいへんですよ。でも、踊りを喜んでくれる人がたくさんいるし、楽しさもある。だから続けてます」



治さんは元気村の理事も務め、各種行事には積極的に参加している。写真は「お助け大作戦」の出発前の打ち合わせの様子。



ほかにも踊り手たちの姿が（お助け大作戦をはじめ各種行事の担い手に）



ところで、

# 「お助け大作戦」の作業の一つに草刈りがある



草刈りなどの「お助け」は、  
「大作戦」だけではない



治さんをはじめ保存会、元気村の会員、それに一般の住民も実は日常的に近隣の高齢者らに「お助け」の手を差し伸べている。治さんは次のように話す。

「たまに実家に戻ったときに草刈りをします。ついでに隣近所の(高齢者宅の)草も刈ってます。どうしてかって？ それが当たり前ってうか、私が子どもの頃から家族ぐるみの付き合いをしていて、一緒に旅行に出かけたりした間柄だし、草刈りができなくなって困っているのを放っておけませんよね」

目立たない形で日々「お助け」が繰り広げられている。その背景に、地域のつながりがある。

あったかCのような  
地域福祉の拠点に加え、  
住民同士のつながりがあれば、

高齢になっても、  
少しくらい体が不自由でも、  
一人暮らしになっても...

住み慣れた斗賀野で、自宅で、  
ぎりぎりまで安心して暮らす、  
その可能性が大きく広がる

つながりが豊かなら、  
「集い」のカタチもさまざま  
(「あったかふれあい」は、センターだけではない)

たとえば...



# あったかCの「集い」をよく利用する...



# この女性、藤本数代(かずよ)さん



# 自宅車庫を改装し、親しい人たちの「集いの場」に



# 「お助け大作戦」の依頼者でもある(2021年10月17日)



# 【自宅で「集い」を】

2021年の「お助け大作戦」で家の清掃や庭の草刈りを依頼した藤本数代さん(87)。自宅には車庫を改装した「集いの場」がある。その名も「サロン藤」。木曜はカラオケの日、土曜はお茶飲みと食事の日とし、70~90代の男女10人前後が集まって和気あいあいと過ごす。野菜や果物、手料理をおすそ分けしたり、車を運転する人が買いものを手伝ってくれたりも。まるで自主運営型の小さな「あったかC」。

自宅で集いの場を開いたのは「友だちのためというより、私自身が楽しく元気に暮らすためなんです」と数代さん。あいにくコロナ禍をきっかけに定期的な集いはしなくなったが、親しい友人がちょくちょく遊びに来てくれる。友人たちとのつながりを保ち、あったかCを利用することで、一人暮らしでも孤立することなく安心して暮らす。

# 夜の斗賀野を歩くこの女性たちは...



# ほとんどがボランティアグループ「とかの女子会」のメンバー



# 健康づくりと見守りを兼ね、毎晩「歩くサロン活動」





# 【とかの女子会】

「おもしろいことをして斗賀野を元気にしよう」と2014年、地区の女性有志が結成したボランティアグループ。メンバーは40～80代の約30人。元気村の各種行事に積極的に参加・協力するだけでなく、会の主導・主催でさまざまな行事を開いている。途絶えていた七夕祭りを復活させたほか、名所旧跡を巡るウォーキングイベント、みそづくりを通じた住民交流などに取り組む。

話は再び花取り踊りに戻る

# 祭りのあとの宴席での 一つのエピソード

何回目かの乾杯のとき、涙をこらえきれない様子が...



# 田鍋勝さんと妻のマジィさんが宴席に加わったのだった



還暦のお祝いに、仲間から赤いポロシャツを贈られて...



# 喜ぶ勝さん。「まさる」コールが巻き起った





ガンを患う勝さんは、この頃余命宣告を受けている。それでも、できる限り自宅で過ごし、地域の行事に参加し続けた。

赤いポロシャツと「まさる」コールは、事情を知る仲間たちから勝さんへのエールだった。

事故や災害、病気、ケガ、障害、老いといった人生の危機に直面したとき、それらを受け入れる勇気、乗り越える力は、地域のつながりのなかで得られることもある。勝さんがインタビューで語った「僕は斗賀野を愛していますし、斗賀野にも愛されている」という言葉は、そのことを指すのだろう。



# 祭りを見物する勝さん（踊りに参加する予定だったが、体調に配慮し断念）



# マジイさんは衣装の準備作業などを手伝った



**神祭と花取り踊り**のご利益は、  
これらを通して人びとがつながりを育み、  
支え合えるようになることにあるのかもしれない。

**森正彦**さんはこう言っている。

「行事の準備や実行、終わったあとの反省会も含めて、  
つながりづくりです。一緒に汗を流して、終わったら美味  
しいお酒をいただく。これが大事なんですよ」

祭りやイベント、各種の共同作業、そして飲み会が  
**支え合い**の前提となる**つながり**を育む。

さまざまな行事を運営、継続するなかで、  
楽しい時間を共有する場と仲間を得ること。それが、  
**「地域おこし」**や**「地域福祉」**の  
手段であり、目標にもなる。

地域福祉と云えば、

# 練習会で踊るこの人...



# 地域の行事には...



必ずと言っていいほど...





# 姿を見せる (斗賀野だけでなく、ほかの地区でも)





佐川町社会福祉協議会の事務局長、田村佳久さん(50)。

斗賀野出身・在住。田村勇勝さんの次男で、「ぷらっとホームさかわ」の施設長、田村和裕さんの弟に当たる。

2022年11月、8年ぶりの花取り踊り復帰を目指して練習会に参加。「自然に踊れた。体が覚えていた」と喜んだのもつかの間、ぎっくり腰で出演辞退に追い込まれた。

町社協は、各地区住民が参加する「みんなで福祉のまちづくり委員会」の運営や「地域福祉アクションプラン」の策定・実践の枠組みを整えるなどし、地区ごとの住民活動を長期継続的に支援してきた。佳久さんはその支援業務に20年近く携わる。

# 第3次地域福祉アクションプランの計画書（計画期間2018～23年）



# 【地域福祉アクションプラン】

地域福祉アクションプランは、社会福祉法に基づき市町村が定める「地域福祉計画」と、市町村社会福祉協議会が住民や民間団体などと連携してつくる「地域福祉活動計画」を一体的にまとめたもの。

佐川町では、町の「全体計画」と、5つの地区ごとにつくる「地区計画」で構成。地区計画は、集活CやあったかCの拠点運営と、これらを運営する住民組織の活動内容が柱となる。高齢・障害者の生活支援や子育て支援といったものだけでなく、「地域福祉」を幅広く捉え、伝統文化の継承や観光資源の発掘、自然環境の保全、防災、農業振興、地場産品を活用した加工食品開発なども盛り込まれる。

第1次プランは計画期間が2008～12年度の5か年。続く第2次プランも2013～17年度の5か年だったが、第3次プランは2018～23年の6か年とし、町の介護保険事業計画（3か年計画）の策定・実施のサイクルに合うようにした。第4次以降も6か年となる見通し。

第3次プランの計画期間の最終年度となる2023年度、第4次プラン（計画期間2024～29年度）の策定が行われる。策定作業は、6月の各地区の現状と課題に関するアンケート調査を皮切りに、7月の5地区住民代表らによる合同会議（第3次プランの振り返り）、8～10月の各地区住民座談会（1地区2回ずつ開催）、12～2月のプラン策定委員会での協議（委員会は5地区住民代表らで構成し、新しい地区計画案などを検討）と続き、3月の新プラン策定、発表という流れ。

プランが策定され計画期間がスタートすると、5地区の住民代表らで構成する「みんなで福祉のまちづくり委員会」が毎年度数回ずつ会合を開き、地区ごとのプランの進ちょく状況などについての情報・意見交換を行う。

**斗賀野**の「**地域づくり**」は、  
地域福祉アクションプランによっても  
裏付けられ、推進される。

行政や社協は、プランの策定・実践に  
関する話し合いの枠組みを設けることで、  
地域づくりをあと押ししている。

# 第3次プラン策定に向けた5地区の合同会議(2017年7月7日)



## 第2次プランの振り返りなどを行った(斗賀野地区のテーブル)



# 閉会後はやっぱり懇親会





# 「みんなで福祉のまちづくり委員会」の総会(2018年11月19日)



写真提供：佐川町社会福祉協議会

# 第3次プランの進ちよく状況などを確認

アクションプランの  
説明をする佳久さん



写真提供：佐川町社会福祉協議会

# 閉会後はもちろん懇親会



写真提供：佐川町社会福祉協議会

# 佐川社協 地域づくりの考え方

## 人のつながりが人を支える地域づくり

### 1 組織が必要

地域自治めざして地域組織化(文化の醸成)

### 2 拠点が必要

人と情報が集まる拠点(ハード)と中核スタッフが必要

### 3 仕組みづくりが必要

ロールシフトが進み対応不可ニーズ増大(お隣近所、小学校区役割分担)

### 4 文化づくりが必要

地域の一員として、地域内でお互い様のイキイキした関係づくりができるように

まじめに。おもしろく。  
夢描く地域づくり

地域福祉計画・  
地域福祉活動計画  
(地域福祉アクションプラン)

## みんなで福祉のまちづくり委員会 活動のポイント

- ① みんなで!楽しく!
- ② 夢は「見る」ではなく、「語る!」
- ③ あせらず、あきらめず!

この**三つのポイント**は、  
斗賀野の住民活動のそこかしこに見られる。

「福祉」に限らず、住民が地域で何かの活動を  
立ち上げ、継続していくうえで欠かせない要素だろう。

# ① みんなで! 楽しく!





## ② 夢は「見る」ではなく、「語る!」



### ③ あせらず、あきらめず!



# 〈まとめ〉

斗賀野では、つながりを培う生活文化が、昔から守り継がれてきた。

つながりは支え合いの基盤となり、住民のまとまりを生み出し、地域づくりの土壌となって、「種まく人」「育てる人」をあと押しする。

神祭と花取り踊りの継承、元気村の設立とその後の活動、そのほかすべての行事や飲み会は、「活気があり、誰もが暮らしやすい斗賀野」を育むためのいわば土であり種であり、たゆまぬ畑仕事であり、豊かな実りでもある。その実りがまた、よい土壌をもたらす。

土づくり、種まき、畑仕事、そして豊かな実りもにたとえられる、地域づくりの好循環こそ「斗賀野の底力」(勝さんの言葉)

つながりと支え合いの生活文化は  
親から子、孫へ...











年配から青壮年、  
子どもたちへ...



佐川町  
祭典

御神燈

御神燈

平成十八年十一月吉日











法人  
元気村

# たらふく秋まつり





過去から現在、そして未来へ、  
時代を越えて続いていく

# 花取り踊りと とかの元気村

「つながり」と「支え合い」の源流を求めて  
高知県佐川町の生活文化と地域福祉・取材報告その1〈斗賀野地区〉

## 報告おわり

斗賀野地区に関するこのレポートは、「子どもから高齢者まで、障害のあるなしにかかわらず、誰もが暮らしやすい地域をつくる」ために何が必要かを考え、話し合う際のヒントにしてもらうことを目的に、NPO法人全国コミュニティライフサポートセンター（＝CLC、宮城県仙台市）の木村利浩が制作しました。内容は、2017年7月から2023年1月までに行った取材に基づいています。ただし、登場人物の年齢や所属、役職などに関しては2021年10月～2023年1月にそれぞれ確認した時点のものとなっています。特定の基準日を設けていないため、登場人物同士で年齢を比較すると、実際の年齢差より1～2年のズレが生じている場合があります。ご了承ください。

斗賀野の素晴らしさは、このようなレポートでは到底表現することはできません。ただ住民の皆さんの明るく情熱に満ちた表情を一瞬でも、深い知恵と優しさにあふれた言葉を一言でも、捉えて記述できれば、それでよしとしました。地域づくりに心を寄せる人、志を持つ人ならばその一瞬・一言から多くを感じ取り、きっと自らの実践に活かしてくれると信じます。末筆ながら、レポートに登場する方々をはじめ取材に協力して下さった多くの住民の皆さんに、心から感謝申し上げます。

2023年5月 木村利浩